

C-5

3歳児の咀嚼習慣に関する疫学的研究
—体質傾向との関係について—

○福泉裕子、秋本光子、石田万喜子、
山口理衣、小笠原靖、加納篤子、
高田圭介、尾崎正雄、本川 涉

福歯大・歯・小児歯

目的： 近年、生活の多様化、食生活の変化に伴い咀嚼習慣も変化しており、咀嚼問題児が増加しているといわれている。この様な問題に対して顎の発育や歯列不正との関係について多くの研究が行われているが、体質など全身との関係に関する研究は少ないようである。そこで演者らは、3才児の咀嚼習慣と体質傾向との関係について、調査した結果、興味深い知見が得られたので報告する。

対象および方法： 調査は、福岡市内の保健所で行われている3歳児健診に来所した545名を対象とした。保護者に配布及び回収したアンケート用紙の中で全身疾患及び先天異常などを有する者を除外し、542名（男287名、255名）を抽出した。体質傾向の判定は、高木、坂本らの幼児児童性格診断検査の項目を参考に独自の集計方法を用い、体質不安定群、一般群、安定群に分類した。この分類を用いて小児の咀嚼習慣との比較検討を行った。

結果および考察： 体質傾向の3つのグループについて、咀嚼習慣のアンケート項目を比較検討した結果、咀嚼不良を表すほとんどの項目に有意差が認められ、体質不安定群に咀嚼不良者が多かった。また、上記の対象となった542名のうちで齲蝕及び歯牙形態異常、軟組織疾患を有する者を除いた139名について比較検討した結果、主に咀嚼速度などの食習慣に関する問いに対して有意差が認められた。このように、体質傾向不良者には、咀嚼不良の者が多く認められることから、患者に対し咀嚼指導を行うときには、顎の発育や歯列不正との関係ばかりでなく、体質との関係についても指導していく必要があると思われる。

C-6

上顎両側にみられた移転歯の一例

○豊村純弘・龍野雅浩・渋江 拓・久保山博子・
本川 涉
福歯大・歯・小児歯

緒言： 移転歯とは歯の形成期あるいは萌出期に何らかの原因により、歯がその本来の位置から著しく異なった位置に萌出している状態をいう。

今回、演者らは本学小児歯科で管理を行っている小児において、9歳4ヵ月時に上顎左右両側の、犬歯と第一小臼歯の移転が認められた症例に遭遇したので報告する。

症例

患者：原○ 靖○ 1歳6ヵ月 女児

初診日：昭和63年12月26日

主訴：上顎前歯部の外傷

家族歴：特記すべき事項は認められない。

既往歴：患児は妊娠10ヵ月に難産、鉗子分娩で仮死状態で出生、出生時体重は2895gであった。

その他特記すべき事項は認められない。

処置および経過： 外傷部の経過観察、予防処置および定期検診を行い、平成3年11月20日、患児4歳5ヵ月時に総合的資料採取のため、パノラマX線写真を撮影した。この時点では、上顎左右両側の犬歯部に犬歯と第一小臼歯と思われる歯牙の重なった像が認められた。その後、平成8年10月17日、患児9歳4ヵ月時のX線所見で、上顎左側において第一小臼歯と第二小臼歯との間に犬歯が認められ、また、上顎右側では犬歯の根尖部に第一小臼歯が認められた。

考察： 岡本らは、移転歯が歯列内で生じているものを完全型、歯列外で位置を取り違えたものを不完全型と分類している。また、移転歯の発生部位は、その殆どが上顎であり、犬歯と第一小臼歯において最も高頻度に見られるものの、その発現頻度は極めて低いと述べている。よって、今回の様に上顎左右両側で、犬歯と第一小臼歯の移転が認められたのは、非常に稀な症例であると思われる。

今後、移転歯についての治療方法は幾つか考えられるが、本症例においては、経過観察を行い、萌出後、形態修正あるいは、歯牙移動を行う予定である。